

「坊っちゃん」における祝祭の時空間

道園 達也^{1,*}

Time and Space of Carnival in “Botchan”

Tatsuya Michizono^{1,*}

“Botchan” is a carnivalized literature. An analysis of chapter 9 and 10 reveals the conditions for carnival in “Botchan”. The conditions are that there must be official statements, withdrawal of authority, slapstick violence, and diverse voices. These conditions make “Botchan” a carnivalized literature. And the place of narrative is also carnivalized. The voice of “Ore”, the narrator of “Botchan” is heard as one of diverse voices. There is time and space of carnival in the place of narrative. “Botchan” is filled with “a carnival sense of the world” (Bakhtin).

キーワード：祝祭の物語、祝祭の時空間、語りの場

Keywords : Carnivalized Literature, Time and Space of Carnival, Place of Narrative

1. 課題設定

「坊っちゃん」は祝祭の物語である。だから楽しい。そこで、祝祭の条件は「うらなり君の送別会」(九、p.101)⁽¹⁾と「祝勝会」(十、p.114)の表現を分析することによって明らかにする。それらの条件を適用することで「坊っちゃん」は祝祭の物語になる。

「坊っちゃん」研究史において、平岡敏夫が1971年に発表した『坊っちゃん』試論⁽²⁾は注目すべき論として定評がある。平岡敏夫は「坊っちゃん」の末尾に触れて「坊っちゃん」の「熱烈な正義漢」という「性格の一貫性」からすれば「帰京して街鉄にとどまっている」のは「ウソであり、坊っちゃんは死んだ」と述べる。というのは「坊っちゃん」が一貫して「熱烈な正義漢」でありつづけていれば「街鉄でも正義をふりまわして辞職することになるはずだからである。したがって「無事街鉄にとどまり、月給二十五円、家賃六円で清とうちを持って暮らしている」のは「熱烈な正義漢」の生き方ではない。そのように「性格の一貫性」が失われているということが「坊っちゃんは死んだ」ということだ。その上で、平岡敏夫は「それまでの坊っちゃんが死ぬことによって『東京で清とうちを持つ』ことは実現する」が、「清を死にひき落とすことで、この末尾全体に（ひいては作品全体に）深い哀切感をにじみ出させている」と述

べている。そうして、漱石は「死によって永遠にへだてられつつも、ひたすらに待ちつづける切実な女性存在」を表現したというのが平岡敏夫の主張である。その後、平岡敏夫は1989年に岩波文庫の改版『坊っちゃん』の注と解説⁽³⁾を執筆し、1992年に『坊っちゃん』試論を含む複数の論文を集成した『坊っちゃん』の世界⁽⁴⁾を刊行している。それらについて見れば、平岡敏夫の主張は『坊っちゃん』試論以来一貫している。

平岡敏夫『坊っちゃん』試論が画期的な論文であるのは「坊っちゃん」の従来とは異なる読みの可能性を示したからである。たとえば有光隆司は『坊っちゃん』の構造⁽⁵⁾において「以後の漱石研究に大きな示唆を与えた」と評価し、「平岡氏の提起した問題は、いわばこれまでの明るい『坊っちゃん』から暗い『坊っちゃん』への読みかえに新機軸を見出し、暗い漱石作品群との紐帯を見出した点にあらう」と指摘する。有光隆司の指摘を踏まえると、「坊っちゃん」研究史は平岡敏夫の論以降「暗い漱石作品群との紐帯」を明らかにする方向に進んだと言える。数多くの論文がそれぞれの方法で一面的な読みを脱却し、多様な読みの可能性を切り拓いてきた。本稿は個々の論文を丹念に読み解く作業が十分でないが、多様な読み方とは言っても多くは「暗い」方に目を注ぎがちだったのではないだろうか。その結果、ほとんど視野に入らなくなってしまったのが前稿⁽⁶⁾で論じたように身体表現や言語遊戯であった。祝祭もまた「暗い」方を見る目には入らない。本稿は「坊っちゃん」について祝祭の観点で検討をおこなう。

¹ リベラルアーツ系
〒861-1102 熊本県八代市平山新町 2627
Faculty of Liberal arts
2627 Hirayama-Shinmachi, Yatsushiro-shi, Kumamoto, Japan 866-8501

* Corresponding author:
E-mail address: mitizono@kumamoto-nct.ac.jp (T. Michizono).

2. 祝祭の条件

「坊っちゃん」における祝祭として、まず「うらなり君の送別会」と「祝勝会」を取り上げる。後者は文字どおり祝祭と見なしてよいであろう。一方、前者をそう見なすのは送別会の席上で山嵐が「吾輩は大に古賀君のためにこの転任を祝するのである」(九、p.107)と発言するからである。そうして「うらなり君の送別会」と「祝勝会」を祝祭と見なすことができる。それらの表現から「坊っちゃん」における祝祭の条件が析出される。

2.1 「うらなり君の送別会」の場合

「うらなり君の送別会」は「花晨亭」という「当地で第一の料理屋」で開かれる。「おれ」と山嵐が到着したときには「人数ももう大概揃って」いた。しばらくして「書記の川村」が「どうか御着席を」と呼びかけ、出席者それぞれが然るべき場所に座ると「やがて御膳が出る。徳利が並ぶ」という次第で準備が整う。(九、pp.105-106)

幹事が立って、一言開会の辞を述べる。それから狸が立つ、赤シャツが起つ。悉く送別の辞を述べたが、三人とも申し合せたようにうらなり君の、良教師で好人物な事を吹聴して、今回去られるのは洵に残念である、学校としてのみならず、個人として大に惜しむ所であるが、御一身上の御都合で、切に転任を御希望になったのだから致し方がないという意味を述べた。(九、p.106)

幹事と狸(校長)、赤シャツ(教頭)が「三人とも申し合せたように」同じことを述べたという。うらなり君(古賀)は「良教師で好人物」であるから「今回去られるのは洵に残念である」、しかしながら「御一身上の御都合で、切に転任を御希望になったのだから致し方がない」というのは送別会の場での幹事と校長、教頭という立場にふさわしい発言である。このように人が場と立場に応じた言葉を口にするのを公式の発言と呼ぶことにする。

それに対して「山嵐がぬっと立ち上がったから、おれは嬉しかったので、思わず手をぱちぱちと拍った」とき「狸を始め一同が悉くおれの方を見た」(九、p.107)のは山嵐が立ち上がることも、そんなところで拍手するのも送別会の場では異例のことだからであろう。一方、うらなり君の対応は送別会の「主人公」(九、p.106)にふさわしい。

先生は御鄭寧に、自席から、座敷の端の末座まで行って、慇懃に一同に挨拶をした上、今般は一身上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生方が小生のためにこの盛大なる送別会を御開き下さったのは、まことに感銘の至りに堪えぬ次第で——ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を頂戴して、大いにありがたく服膺する訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、何とぞ従前の通り御見捨てなく御愛顧のほど願います。とへえつく張

って席に戻った。(九、p.108)

うらなり君が「自席から、座敷の端の末座まで行き、謝辞を述べた上で変わらぬ「御愛顧」を願うのは送別会の「主人公」にふさわしい常識的な言動である。それは公式の発言として「送別の辞」が述べられることと呼応している。山嵐と「おれ」以外の面々は「送別会」の場と、それぞれの立場に応じた言動を忠実に実行してみせている。

「うらなり君の送別会」は続けて飲食に移る。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。(中略)

そのうち爛徳利が頻繁に往来し始めたら、四方が急に賑やかになった。(中略)

それから一時間ほどするうちに席上は大分乱れて来る。まあ一杯、おや僕が飲めというのに……などと呂律の巡りかねるのも一人二人出て来た。(九、p.108-109)

酒宴の典型的な進み方と言ってよいだろう。「まあ一杯、おや僕が飲めというのに」というのは「おれ」が誰かに酒を勧められたのを断ったのであろう。山嵐に「酒なんか飲む奴は馬鹿だ」(九、p.102)と言い放った「おれ」は、その場で一滴も酒を飲まず、素面で過ごしているはずだ。「呂律が巡りかねるのも一人二人出て来た」というのも酒の席でよく見られる光景である。

ここで注意しておきたいのは「校長はいつ帰ったか姿が見えない」(九、p.110)し、赤シャツも「芸者が三、四人這入って来た」のと入れ替わるように「知らん顔して出て行ったぎり」(九、p.111)になることである。赤シャツが姿を消したのは馴染みの芸者が来たからであった。校長と教頭が不在の今「花晨亭」は乱痴気騒ぎとなる。

芸者が来たら座敷中急に陽気になって、一同が関の声を揚げて歓迎したのかと思う位騒々しい。そうして或る奴はなんこを攫む。その声の大きな事、まるで居合抜の稽古のようだ。こっちでは拳を打てる。よっ、はっ、と夢中で両手を振る所は、ダーク一座の操人形よりよっぽど上手だ。向うの隅ではおい御酌だ、と徳利を振って見て、酒だ酒だと言いつけている。どうも八釜しくて騒々しくて堪らない。

(九、p.111)

そんなふうに苛立つ「おれ」は素面のまま、批判的な第三者の立場で乱痴気騒ぎを見ている。そして、そうであることによって乱痴気騒ぎは生き生きと語られることになる。人々が「銘々胴間声を出して何か唄い始める」(九、p.111)のが聞こえてくる。

おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱えたから、おれは唄わない、貴様唄ってみろといったら、金や太鼓でねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどこ、どんのちゃんちきり

ん。叩いて廻って逢われるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどこ、どんのちゃんちきりと叩いて廻って逢いたい人がある、と二た息にうたって、おおしんどといった。おおしんどなら、もっと楽なものをやればいいのに。(九、p.111-112)

そこに野だが現れ「相変らず嘶し家見たような言葉使い」で話し、「たまたま逢いは逢いながら……と、いやな声を出して義太夫の真似をやる」し、「鈴ちゃん僕が紀伊の国を踰るから、一つ弾いて頂戴」という。「漢学の御爺さん」が「歯のない口を歪めて」口にするのは「そりゃ聞えませぬ伝兵衛さん、お前とわたしのその中は……」までしか覚えておらず、後は忘れてしまった俗語、「博物」が耳にして「なるほど面白い、英語入りだねと感心」するのは「花月巻、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはヴァイオリン、半可の英語でべらべらと、I am glad to see you」という俗語だった。山嵐は「ステッキを持って来て、踏破千山万岳烟と真中へ出て独りで隠し芸を演じ」、野だは「既に紀伊の国を済まして、棚の達磨さんを済して丸裸の越中禪一つになって、棕櫚箒を小脇に抱い込んで、日清談判破裂して……と座敷中練りあるき出した」のである。(九、pp112-113)

いま「花晨亭」には、いくつもの陽気な声がかい調子で響いている。しかし、素面の「おれ」には酔った末の狂態にしか見えない。こうして「うらなり君の送別会」は教師の権威が引き下げられる場と化する。

その中で「おれ」は第三者の立場にいらなくなり、批判的な態度の現れとして野だに手を出すことになる。「おれ」がうらなり君を連れ出して共に退座しようとしたとき、野だが邪魔立てする。

野だが箒を振り振り進行して来て、や御主人が先へ帰るとはひどい。日清談判だ。帰せないと箒を横にして行く手を塞いだ。おれはさっきから癩癩が起っている所だから、日清談判なら貴様はちゃんちゃんだろうと、いきなり拳骨で、野だの頭をぼかりと喰わしてやった。(九、p.113)

「癩癩」を破裂させた「おれ」が「野だの頭をぼかりと喰わしてやった」のである。「ぼかりと」と軽妙に語られることに留意して、それをドタバタの暴力と呼ぶこととする。

2.2 「祝勝会」の場合

「祝勝会」は「練兵場」で举行される。校長は「生徒を引率して参列」し、「おれも職員の一員として一所にくっついて行く」ことになる。「八百人」の生徒を「体操の教師が隊伍を整えて、一組一組の間を少しずつ明けて、それへ職員が一人か二人ずつ監督として割り込む仕掛け」である。それについて「おれ」が「頗る不手際」だと思っるのは「生徒は小供の上に、生意気で、規律を破らなくっては生徒の体面にかかわると思ってる奴らだから、職員

が幾人ついて行ったって何の役に立つもんか」と思っているからである。生徒たちは「勝手な軍歌をうたったり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに関の声を揚げたり、まるで浪人が町内をねりあるいてるようなものだ」し、「教師のわる口を喋舌ってる」のや「天麩羅だの、団子だの、という声が絶えずする」のである。嫌気が差した「おれ」が「どうしても早く東京へ帰って清と一所になるに限る」などと思っていると「何だか先鋒ががやがやと騒ぎ出し」て「列はびたりと留まる」のである。「体操教師」に尋ねると「曲り角で中学校と師範学校が衝突した」という。そのときは「中学校が一步譲った」ことで事が収まる。(十、pp.114-116)

「練兵場」での「祝勝の式」は次のとおりである。

祝勝の式は頗る簡単なものであった。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む。参列者が万歳を唱える。(十、p.117)

そこで「旅団長」は旅団長として、「知事」は知事として「祝勝の式」にふさわしい「祝詞」を口にしたはずである。「祝詞」の引用はないものの公式の発言が示唆されている。これについては後に改めて検討する。

さて、「祝勝の式」から帰宅した「おれ」は「清への返事をかきかけ」ながらも断念し、「一本の蜜柑」に思いを巡らせる。そこに山嵐が訪ねてくる。

今日は祝勝会だから、君と一所に御馳走を食おうと思っって牛肉を買って来たど、竹の皮の包を袂から引きずり出して、座敷の中へ抛り出した。おれは下宿で芋責豆腐責になつてる上、蕎麦屋行き、団子屋行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋と砂糖をかり込んで、煮方に取りかかった。(十、p.118)

山嵐と「おれ」が牛肉を食しながら「赤シャツ退治の計略を相談している」と「赤シャツの弟」が「祝勝会の余興を見に行かないか」と誘いに来る。会場に行くと、そこには「世界万国の国旗」が掲げられ、「高知の何とか踰り」のために「東の隅に一夜作りの舞台」がある。「活花が陳列してある」し、「頻りに花火」が上がっている。「評判の高知の何とか踰り」は「悉く抜き身を携げている」三十人の男が、「舞台の端に立ってる」男の「拍子」に合わせて演武するもの。男は「いやあ、はああと呑気な声を出して、妙な謡をうたいながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩」いている。そこに響くのは「呑気な声」と「妙な謡」である。(十、p.121)

山嵐と「おれ」が、それに見とれていると「わっという関の声」とともに「諸所を縦覧していた連中」が「右左りに揺き始める」のが見えた。「喧嘩だ喧嘩だという声」が耳に届く。そこにまた「赤シャツの弟」が来て「先生また喧嘩です、中学の方で、今朝の意趣返しをするんで、また師範の奴と決戦を始めた所です。早く来て下さい」と

告げる。山嵐が「世話の焼ける小僧だまた始めたのか、いい加減にすればいいのに」と駆けだし、「おれ」も後を追う。「師範の方は五、六十人もあろうか、中学は慥かに三割方多い」というから合わせて百人以上の大乱闘である。山嵐が「こうなっちゃ仕方がない。巡査が来ると面倒だ。飛び込んで分けよう」というや否や「おれ」は「いきなり、一番喧嘩の烈しそうな所へ躍り込んだ」のである。(十、p.124)

しかし、大乱闘を収めるのはそう簡単ではない。

ひゅうと風を切って飛んで来た石が、いきなりおれの頬骨へ中つたなと思ったら、後ろからも、脊中をどやした奴がある。教師のくせに出ている、打て打てという声がする。教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛げる。という声もする。おれは、なに生意気をぬかすな、田舎者のくせにと、いきなり、傍にいた師範生の頭を張りつけてやった。石がまたひゅうと来る。今度はおれの五分刈の頭を掠めて後ろの方へ飛んで行った。山嵐はどうなったか見えない。こうなっちゃ仕方がない。始めは喧嘩をために這入ったんだが、どやされたり、石をなげられたりして、恐れ入って引き下がるうんでれがんがあるものか。おれを誰だと思うんだ。身長は小さくっても喧嘩の本場で修業を積んだ兄さんと無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしていると、やがて巡査だ巡査だ逃げろ逃げろという声をした。(十、p.125)

大乱闘のまっただ中で「ひゅうと風を切って飛んで来た石」が「おれの頬骨」に当たり、「脊中を棒でどやした奴」がいる。「教師のくせに出ている、打て打てという声」も「教師は二人だ。大きい奴と、小さい奴だ。石を抛げる。という声」もする。教師の権威は引き下げられ、暴力は激化する一方だ。「こうなっちゃ仕方がない」とは山嵐が喧嘩を止めに入る際に口にした言葉だったが、今度は「おれ」が喧嘩の当事者となることを決意する言葉である。「おれ」は教師の権威によって喧嘩を仲裁することを早々に投げ出し、生徒たちと対等な立場で暴れるのである。こうして「無茶苦茶に張り飛ばしたり、張り飛ばされたりしている」うちに巡査が登場し、大乱闘は収束する。大乱闘の場面には権威の引き下げとドタバタの暴力が同時に現れている。

3. 「坊っちゃん」の場合

前節において「うらなり君の送別会」と「祝勝会」の表現を分析した結果、公式の発言、権威の引き下げ、ドタバタの暴力が祝祭の条件として析出された。また、飲食も欠かせないし、そこには多様な声が聞こえている。飲み食いし、声を出すことに彩られて公式の発言、権威の

引き下げ、ドタバタの暴力が、そのとおりの順序で展開するのが「坊っちゃん」である。「うらなり君の送別会」と「祝勝会」という部分について言えることが「坊っちゃん」という全体に適用される。

3.1 公式の発言

「四国辺の中学校」に着任した「おれ」は校長と面会し、「恭しく大きな印の捺った、辞令」を受け取る。校長から「今に職員に紹介してやるから、一々その人にこの辞令を見せるんだ」と助言されるが、職員が揃うにはまだ時間がかかる。(二、p.21)

校長は時計を出して見て、追々ゆくりと話すつもりだが、先ず大体の事を呑み込んで置いてもらおうと、それから教育の精神について長い御談義を聞かした。おれは無論いい加減に聞いていたが、途中からこれは飛んだ所へ来たと思った。校長のいうようにはとても出来ない。おれ見たような無鉄砲なものをつらまえて、生徒の模範になれ、一校の師表と仰がれなくては行かんの、学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、とむやみに法外な注文をする。(二、p.21)

校長が「おれ」に言い聞かせた「教育の精神」とは「生徒の模範になれ」、「一校の師表と仰がれなくてはならん」、「学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれない」ということだった。「おれ」は「法外な注文」だと思い、「到底あなたの仰る通りにゃ、出来ません、この辞令は返します」と口にする。校長は、そんな発言に少々面食らったようだが、少しして「今のはただ希望である、あなたが希望通りに出来ないのはよく知っているから心配しなくてもいい」という。(二、pp.21-22)

校長は「教育の精神」が建前でしかないということをお口にする。そうでありながらも「教育の精神」は新任教員への辞令交付の場で、校長の立場で伝える内容として申し分がない。

「教育の精神」は校長が「おれ」に言い聞かせるだけではない。「おれ」に対して無礼を働いた寄宿生の処分法についての会議」の場面で、校長が口火を切って「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳の致す所」云々というのはもちろんそうだし、赤シャツが教頭として「平常の徳化が少年に及ばなかったのを深く慚ずる」というのもそうだ。また、野だが「われわれ職員たるものはこの際奮って自ら省みて、全校の風紀を振粛しなければなりません」というのも、まず「自ら省み」ることが欠かせないのだから同じく「教育の精神」に裏づけられた発言である。山嵐も同じで、処分案は異なるものの「教育の精神は単に学問を授けるばかりではない、高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹すると同時に、野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩するにあると思います」と述べ

ている。すなわち「坊っちゃん」において「教育の精神」は公式の発言として登場しているのである。

教師たるもの「教育の精神」の体現者として振る舞うことが権威を高めることになる。校長は「会議の引き続きだと号して」（六、p.71）次のように述べている。

生徒の風儀は、教師の感化で正していかななくてはならん、その一着手として、教師はなるべく飲食店などに出入しない事にしたい。尤も送別会などの節は特別であるが、単独にあまり上等でない場所へ行くのはよしたい——たとえば蕎麦屋だの、団子屋だの——といいかけたらまた一同が笑った。（六、pp.71-72）

「一同が笑った」のは「蕎麦屋だの、団子屋だの」という言い方が「おれ」への当てつけであることが分かっているからであろう。「教師はなるべく飲食店などに出入しない事にしたい」のは「生徒の風儀は、教師の感化で正していかななくてはならん」からである。これも正しく「教育の精神」である。

しかし、校長が訓示において「送別会などの節」を除外するのは「教育の精神」が建前でしかないからである。そのときはもう「うらなり君の送別会」が予定されていたのであろう。それが「特別」という言い方は「教師の感化」云々をひととき忘れてよいというメッセージを含意するだろう。そうであれば、あの乱痴気騒ぎは校長公認なのであった。

さて、その際校長が赤シャツとともに不在であったことはどう考えられるだろうか。赤シャツは山嵐の「天誅」の対象となる一方、校長は権威が引き下げられることもドタバタの暴力を振るわれることも決してない。別稿^⑦で述べたように「おれ」は校長に対してだけは一貫して「私」という一人称で話すという常識的な側面がある。「おれ」にとって校長は特別な存在なのだ。また、「祝勝会」の「祝詞」が引用されないことで師団長や知事は権威の引き下げの対象となりえない。つまり「坊っちゃん」における権威の引き下げは対象が限定されているのである。

3.2 権威の引き下げ

生徒たちの無遠慮なからかいが始まるのは「おれ」の飲食がきっかけである。「おれ」は「ある日の晩大町という所」で蕎麦屋を見つめる。「その晩は久しぶりに蕎麦を食ったので、旨かったから天麩羅を四杯平らげた」ところ、店内にいた生徒が言いふらしたためだろうか、翌日最初の教室の黒板に「天麩羅先生」と書かれていた。「おれ」が「天麩羅を食っちゃ可笑しいか」というと、次の教室では「一つ天麩羅四杯也。但し笑うべからず」と書かれている。「癪に障った」から「だまって、天麩羅を消して、こないたずらが面白いか」などという、その次には「天麩羅を食うと減らず口が利きたくなるものなり」

と書かれている。（三、pp.31-33）

「団子」を食べたのも同じようからかわれるし、「温泉」の入り方についてもそうだった（三、pp.33-34）。「おれ」が「そのうち学校もいやになった」（三、p.31）のは、まるで「生徒全体がおれ一人を探偵しているよう」（三、p.34）なからかいが続いたからである。生徒たちからすれば親しみの表現だったのかもしれないが、「おれ」には失礼で気に障る態度でしかない。このような権威の引き下げが「宿直事件」（十、p.114）を引き起こす。

「おれ」は「学校の宿直はなおさら厭だ」と思いながらも「これが四十円のうちへ籠っているなら仕方ない。我慢して勤めてやろう」と考える。「晩飯」の後温泉に出かけ、帰りに校長と山嵐に会う。学校に戻ると「二時間ばかりは小使」と話す。やがて蒲団に入り「ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた」ので、「おれ」が「毛布をぱっと後ろへ抛ると、蒲団の中から、バツが五、六十飛び出した」のである。（四、pp.35-38）

「おれ」が寄宿生と「談判」する場面で「なんでバツなんか、おれの床の中へ入れた」と詰問すると、そのうち生徒の一人が「そりゃ、イナゴぞな、もし」と応じる。「おれ」がバツと呼んでいるのは、生徒によればイナゴである。しかし、それが「イナゴ」だということを「おれ」は少しも受け入れようとしない。

「箆棒め、イナゴもバツも同じもんだ。第一先生を捕まえてなもした何だ。菜飯は田楽の時より食うもんじゃな」とあべこべに遣り込めてやったら「なもしと菜飯は違うぞな、もし」といった。いつまで行ってもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバツでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツを入れてくれと頼んだ。

「誰れも入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中にいるんだ」

「イナゴは温い所が好きじゃけれ、大方一人で御這入りたのじゃある」

「馬鹿あいえ。バツが一人で御這入りになるなんて——バツに御這入りになられてたまるもんか。

——さあなぜこないたずらをしたか、いえ」

「いえてて、入れんものを説明しようがないがな」

（四、p.39）

「なもし」に「菜飯」の言語遊戯をついつい口にしてしまい、「あべこべに遣り込めてやっ」と思い込んだ「おれ」は、いったんは「イナゴでもバツでも」といいながらも、意固地に「バツ」と言い続ける。「おれ」は生徒の方言と惚けた対応を「第一先生を捕まえて」などと難詰するが、すでに教師の権威は引き下げられている。「おれ」が「バツ」と言い張るのは生徒と対等な関係での言い合いである。お互いに自らの非を認めずに口げんかする子ども同士のようなものだ。そこに公式の発言とし

て示された「教育の精神」は、ほんの少しも見出せない。「宿直事件」は、さらに続く。「床板を踏みならす音」と「大きな関の声」がする。「おれ」が二階に駆け上がると「急に静まり返って、人声どころか足音もしなく」なる。しかし生徒たちは隙を見て、再び「前のように拍子を取って、一同が床板を踏み鳴らした」のである（四、p.42-43）。生徒は断続的に騒ぎ、「おれ」は引き下がらない。「今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければあさって勝つ。あさって勝てなければ、下宿から弁当を取り寄せて勝つまでここにいる」（四、p.44）の心意気だ。

おれの坐ってた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立っている。おれは正気に返って、はっと思う途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引っ攫んで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向けに倒れた。ざまを見ろ。残る一人がちょっと狼狽した所を、飛びかかって、肩を抑えて二、三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をばちばちさせた。さあおれの部屋まで来いと引立てると、弱虫だと見えて、一も二もなく尾いて来た。夜はとうにあけている。（四、p.44）

そして「おれ」が「五十人余りを相手に約一時間ばかり押問答をしている」と校長が現れて騒動は収まる。ちょうど「祝勝会」での大乱闘が巡査の登場によって収束したのと同じように、寄宿舎での騒動は校長の来訪によって収まる。「坊っちゃん」において巡査も校長も権威者である。校長が生徒に対して「追って処分するまでは、今まで通り学校へ出る。早く顔を洗って、朝飯を食わないと時間に間に合わないから、早くしろ」というのは教師の権威を存分に発揮した言い方である。それに比べると「おれ」の言動は生徒の無遠慮な接触に対して、対等な関係で対処しようとするものだった。「おれ」と生徒との関係において教師の権威は引き下げられている。

それらの場面にドタバタの暴力と呼んでよい「おれ」の言動が見られるのは、特に「おれ」と生徒の関係において権威の引き下げが深く関わるからである。そうして「おれ」は寄宿舎での騒動に対処し、「祝勝会」での大乱闘に飛び込んだのである。

3.3 ドタバタの暴力

山嵐が辞職し「温泉の町の榎屋の表二階」に潜んだのは赤シャツに「天誅を加える」ためであった。その好機は「八日目」にしてようやく訪れる。「帳場の時計が遠慮もなく十時を打った」後、しばらくして現れた赤シャツと野だの「二人の影法師」が山嵐と「おれ」を蔑む言葉を交わしながら「角屋の中へ這入った」のである。山嵐と「おれ」は「二人の帰路を要撃」するべく待機を続ける。「朝の五時」になって「角屋から出る二人の影」を尾行

する。そして「人家のない、杉並木」で山嵐は赤シャツを難詰し、「おれ」は野だに「玉子」を投げつける。山嵐は赤シャツの弁明を聞く気など、もはや少しもない。（十一、pp.134-140）

「だまれ」と山嵐は拳骨を食わした。赤シャツはよろよろしたが「これは乱暴だ。狼藉である。理非を弁じないで腕力に訴えるのは無法だ」

「無法で沢山だ」とまたばかりと撲ぐる。「貴様のような奸物はなぐらなくっちゃ、応えないんだ」とぼかぼかなぐる。おれも同時に野だを散々に擲き据えた。しまいには二人とも杉の根方にうずくまって動けないのか、眼がちらちらするのか逃げようともしない。（十一、pp.140-141）

こうして、山嵐は自らの「天誅」を実行した。山嵐が赤シャツを「ばかりと撲ぐる」、「ぼかぼかなぐる」のと同時に「おれ」は「野だを散々に擲き据えた」のである。

ここでドタバタの暴力を「おれ」の行為に着目して振り返っておくと①寄宿舎での騒動（対生徒）→②「うらなり君の送別会」（対野だ）→③祝勝会での大乱闘（対生徒）→④「天誅」（対野だ）となる。そのうち、山嵐が当事者として関わるのは③と④である。「おれ」は一貫して当事者でありつづけ、①と③で生徒に対して、②と④で野だに対してドタバタの暴力を振るうのである。

4. 祝祭の時空間

「坊っちゃん」について、たとえば石井和夫が論じたように「貴種流離譚のパロディ」⁽⁸⁾という指摘が成り立つのは「坊っちゃん」の話型が異界訪問譚だからである。そこで「坊っちゃん」における空間は〈東京—四国—東京〉と区分され、四国は異界と認識される。一方、祝祭は四国到着後の「おれ」に対する校長の公式の発言に始まり、教師の権威が引き下げられる数々の出来事を挟んで山嵐が赤シャツに「天誅」を下し、「おれ」が野だに手を出すというドタバタの暴力に帰結する。その後「おれ」は山嵐とともに四国を離れる。したがって「坊っちゃん」における祝祭は〈四国／異界〉での出来事と見なすことができる。「坊っちゃん」は「おれ」が東京の日常を離れ、〈四国／異界〉で祝祭を経験し、再び東京の日常に帰る物語である。そこで清は「おれ」の日常を支えてくれる、かけがえのない存在であったと言えよう。

しかし、「坊っちゃん」の祝祭は物語の内容に関して言えるだけではない。「うらなり君の送別会」や「祝勝会」で多様な声が聞こえていたように「坊っちゃん」における語りの中には「おれ」の語る声が響いているのではない。「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」（一、p.7）に始まり、「だから清の墓は小日向の養源寺にある」（十一、p.142）に至る「おれ」の語りには身体の

表現と言語遊戯をとまなう陽気で快い調子に満ちているのではないだろうか。そう考えてよいとすれば「坊っちゃん」における語りの場も祝祭の時空間である。私たち読者は祝祭の時空間としての語りの場において聞き手となって「おれ」の語りに耳を傾ける。祝祭の物語を受容するのに、それ以上の時空間はない。そうして「坊っちゃん」は物語の内容と語りの場を貫いて祝祭の物語であった。

最後に、「坊っちゃん」における祝祭の限界と可能性を明らかにするために、バフチンのカーニバル論と照らし合わせることにする。バフチンは『ドストエフスキーの詩学』⁹⁾において次のように述べている。

通常の、つまりカーニバル外の仕組みと秩序を規定している法や禁止や制限は、カーニバルのときには廃止される。何よりもまず取り払われるのは社会のヒエラルヒー構造と、それにまつわる恐怖・恭順・崇敬・作法などといった形式である。つまり社会のヒエラルヒーやその他の要因（年齢を含む）からくる不平等に基づくものすべてが取り払われるのである。人間同士の間あらゆる距離も取り払われ、カーニバル特有のカテゴリーである、自由で無遠慮な人間同士の接触が力を得ることになる。これはカーニバル的世界感覚の非常に重要な要素である。

バフチンのいうカーニバルでは「不平等に基づくものすべて」や「人間同士の間あらゆる距離」が取り払われる。それに対して「坊っちゃん」の祝祭は権威が引き下げられるとしても、その対象は限定されている。「おれ」（あるいは漱石、と言うべきかもしれない）は決して度外れの言動を見せることはない。「おれ」は「祝勝会」で師団長や知事の「祝詞」に悪態をつくことはないし、その日の大乱闘を収束させた巡査にたてつくこともない。いかに不満があるとしても校長に「おれ」という一人称を用いて直談判することもない。「おれ」は「無鉄砲」を自称しながらも「二十三年四ヵ月」（五、p.55）の若き日本人にふさわしい常識を持ち合わせているのだ。しかし、そのように限定的であっても「坊っちゃん」には確かに「カーニバル的世界感覚」がある。「教育の精神」から逸脱しつつける「おれ」の言動は「社会のヒエラルヒー構造」と「形式」をほんの少し揺さぶるからである。たぶん多くの日本人は「教育の精神」のような公式の発言を聞いても、それがあくまで建前であり、自らの生活を律するものとは少しも考えずに表面上は唯唯諾諾と従うのではないだろうか。そんな私たちに別の生き方を語ってみせてくれる「坊っちゃん」が楽しい。

(令和3年10月11日受付)

(令和3年12月24日受理)

参考文献

- (1)夏目漱石：「坊っちゃん」、ホトトギス、第9巻第7号、附録、pp.1-148、(1906)。
本文の引用は以下のテキストを使用した。夏目漱石：「坊っちゃん」、pp.7-142、岩波文庫・岩波書店、(1989 改版)。なお「参考文献」の記載が煩雑になることを避けるために章の番号を示す漢数字とページ数を引用の末尾に丸カッコで記した。また、ルビと傍点は省略した。
- (2)平岡敏夫：『『坊っちゃん』試論—小日向の養源寺』、文学、第39巻第1号、pp.42-53、(1971)。
本文の引用は以下のテキストを使用した。平岡敏夫：『『坊っちゃん』の世界』、pp.33-66、塙新書・塙書房、(1992)。
- (3)平岡敏夫：「注」、「解説」、「坊っちゃん」、pp.143-173、岩波文庫・岩波書店、(1989 改版)。
- (4)平岡敏夫：『『坊っちゃん』の世界』、塙新書・塙書房、(1992)。
- (5)有光隆司：『『坊っちゃん』の構造—悲劇の方法について』、国語と国文学、第59巻第8号、pp.47-60、(1982)。
- (6)道園達也：『『坊っちゃん』における身体表現と言語遊戯』、熊本高等専門学校研究紀要、第12号、pp.21-28、(2020)。
- (7)道園達也：『『坊っちゃん』の語り』、熊本高等専門学校研究紀要、第11号、pp.33-38、(2019)。
- (8)石井和夫：「貴種流離譚のパロディー「坊っちゃん」」、叙説、第1号、pp.22-29、(1990)。
- (9)ミハイル・バフチン（望月哲男・鈴木淳一訳）：「ドストエフスキーの詩学」、pp.248-249、ちくま学芸文庫・筑摩書房、(1995、原著1963)。